

山形短期大学民話研究センター資料叢書

木小屋の生活

民話序説

編 武田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

木小屋の生活

民話序説

編 武 田 正

木小屋の生活

民話序説

第一部 木小屋の生活 — 飯豊町 —

飯豊町の木小屋についての聞書

五

第二部 昔話 — 東根市 —

1 兎と田螺

2 食わず女房

3 油しめ（油とり）

4 山田白滝

三一

三二

三五

三六

四二

第三部 民話のころ — 私の民話序説 —

5	炭焼長者	四九
6	初夢	五四
7	初夢	五六
8	屁つたれ女中	五九
9	吊し柿売りと南蛮粉売り	六一
10	旅の手品師	六二
11	餅と金	六四
12	果てなし話	六五
	あとがき	九一

「女は大体に無口が美德のやうに考へられ、古来その用語句数は男の使ふものの、三分の一にも足りなかつたと思ふ。その癖知つて居るだけから言へば、気性のしつかりした婦人ならば、却つて並々の男子より多く又精確であつたのである。」

柳田国男（国語の将来）より

第一部

木小屋の生活

—

飯豊町

—

木小屋の生活 (1)

(1) 取り子のこと

(2) 木小屋生活のこと

(3) 針子のこと

(1) 取り子のこと

十五才になるとき、泉額寺さ行ってお詣りするには行をした。その寺さ泊って家さ全然来らんねっだな。取り子の決めようによつて、「十五才にお詣りに行んから、それまで取り子にして呉ろ」て願うわけだな。体弱いと丈夫になるようにて

な。そしてそこさ二週間オコモリして、仏壇の飾ったどこさ寝泊りして、朝げと、御飯食べつどき、必ず水垢離とんなね。明神さまの脇に、水出る大きな清水あつたもんな。そこさ行つて毎日裸になつて御飯食べつどき水浴びしてよ、そして御飯食べんのよ。

水垢離とつてからは便所さ行かんねの、御飯終るまで、もちろん生なまぐさも食んねしだ、御精進で。そして二週間オコモリして、毎朝行ぎようよ。お経読んで三十分ぐらい。季節は秋だったな。人によつて違つていたげどな。そのあたりの法印さまは代参というて、一月に一回ぐらいずつ湯殿山さお詣りに行つたもんだな。

そんどき、その法印さまさ従ついて、お詣りに行く人いるのよ、そうすつど行ぎようしんなね。朝昼晩、冷ひやつたかつたな。まず慣れねうち、寒いときは本当に寒いがつたな。毎日だから誤魔化しさんねがつた。まだ十五才だから真面目だから、そんな誤魔化すなんていう氣あつたもんでないからな。そしていよいよお詣りに行つたよ。あの法印さまという人は堅い人で、カイシュウに泊つて、シズに泊つて、そしてお詣りに行つて、シズさ泊つて歸つて来たけな。

取り子にしてもらつて、年明の年にお詣りする。三つか二つのときに弱くて、とてもこの子はなかなか育たねとか何とか親が思つた場合に、法印さまさ頼んで取り子にしてもらふ。そうすつど毎年米の一斗五升ぐらいずつやるソな。そうすつど権現講があつて、そいつ持つて行つて昼御飯御馳走になつて、毎年御馳走になつて来たものよ。むかしは相当にあつたし、金のある家なのは、体弱くなくてもそういう人あつたな。

ここの日蓮宗の本朝寺も取り子してもらう人があつたげんど、ここはお詣り（湯殿山）に行くなんていうことはないな。

（2）木小屋の生活

木小屋は二階に藁つんでおくし、階下は農具など入つて置いっだもんだ。養蚕のときには、桑など積んでおくこともあつたな。そのあたり、十二月から四月あ

たりまで補習学校というのあったもんだも。それさほとんど義務的に出はったもんだ。そして夜七時から九時頃まで一週間に四回、昼はよくそこで藁仕事などしたもんだな。近所の若衆が寄って部落によつて違うげんでも、一軒の家さえも五六人いっどもあったからな、ほだから十人も集まっていっどもあったべな。東の方の大きな百姓だどよ。そして一丁前なていうことあったな。

一丁前ていえば、ミヌだれば、雨ミヌというの是一日に一つ。それから荷物背負う丸ミヌていうのは二日に一つ。それ、三日間というものは旦那から手間を、奉公人はもらうのよ。三日に終せという風にな。ジンベは一日に五足、深靴は一日一足、ハンバキは一足、ワラジ十足、縄は三百尋、荷縄は三本、それから屋根葺きのアシトウ縄は五本、それは是非ともさんなねなよ。ほだげんでも、いっくらい加減（いいかげん）する人もあったごで。とても冬集まって藁仕事すつときなど遊びだもの、やんやんで…。

俵編みは十俵、タラバシは後から作つけど、一日百枚。あれはひどいな。曲がっての仕事なもんだからな。

「今の若衆にか？いや、わかんね、わかんね。まいど（むかし）のこと言うど、馬鹿ばつかしつかして…なて」

若衆の集まりでの話なて、格別のことなかったな。女の話ぐらいなものだな、後からになつど、百姓などしても分んね、んねがなていう話にもなつて来^くつかつたげんどもな。

同志会作つてから、胆試しなていうて、やったことあつたな。墓さ行つて位牌持つてこいなんてな。

木小屋に集まる人は、奉公人がほとんどだな。その家の息子さんも顔出すことあつたげんど、ほとんど働いて（奉公して）いる人だったな。まあ小作人の子どもさんというものは、長男でも奉公さやらつたもんだな。働きに、家に父親とおつちやがいつから、一町歩そこそこの田なんだからな。んだから子どもが奉公にやらつじやんだもな。ほで四町歩ぐらい作っている家では若衆六人ぐらい使つていたもんだな。そして木小屋の二つも作つて、そして両方で秋などなつど稲こきしつたもんだな。米拵^こつたり。その代り必ずしも年内中に米出し終えるなてない

んだも。春になってからも稲こきして出していたもな。千歯で脱いで始末して一人前四〇束だったもな。

木小屋には近所衆も集まって来たな。んだから傭った傭わっだなんていう気もあまりないがったな。晦には前金一年分ぺろつと持つて行かつでしまうんだ。親父に。後はカラ稼ぎだもの、とても仕様ないから居るというもんだも。ほだから研究して稼いで、いっぱい採つて呉つかないことなく、「こうしろて言えばオイ」ああしろて言えば、オイ」て稼ぐだけの人間で、余計なてあつたもんでない。んだげんどもその時代でさえ、若衆の飲み屋うんとあつたからな。飲み屋さ行つて金使つてゐる者もよくいたな。ここにもあつたし、高石にもあつたし、停車場前にもあつたし、萩生のあたりさも行ぐがったな。旦那はそいつが分れば、ごしやぐべげんど、若衆ていうど、一定の場所さ寝せておくんだな。木小屋の二階とか、あまり家の人が感じないどこさ寝せて置つからな。そうすつど何時来て寝たなていうことわかんねえこともあるんだな。旦那も知しやねでゐるんだな。おらだみたいに入るにも出はるにも錠あけて出はらんねどこは別だったげんどな。

親父は晦^{つめ}に前金とつて来て、ぺろつと使つて、次の年旦那金借りに行つたらこりつと借りらんね話だごで。若衆借りに行つたらぺろつと使つて、親父が。そんなこともあつてだごで。借りらんねということな。ほだから楽しみといえ、そんな楽しみもあつたんだべな。椿から長井の女郎屋さ行つて、女郎屋で女郎買いして夜のうちに帰っている者もいっぱいだけな。

御飯は主家の台所で食べつかったな。もつとも六郎兵衛とかという大きな旦那だど、若衆食べつどこと、家の人食べつどこ別々にしつたもんだげんども、大体ここの百姓家は家内と同じであつたな。

夜御飯食べつど若衆は炉にあたつていたもんだ。子どもがいれば婆んちやが昔話など語つて聞かせたもんだ。奉公人だつて一緒に聞くこともあつたな。

奉公には家によつてちがうげんどな、五十才先になつても、一生奉公している人もいたげんど、大体やつぱり三十才ぐらいで家さ寄つてだ（戻つた）もんだ。家の親父さんでも逝くなればほとんど家さ寄つたもんだな、親父さんでも生きてれば奉公してる人もいたもんだな。それからあまり田作んね人でもあつど、家の

生活の勘定あんべし、百姓奉公してる人もいたけな。もっとも手間取りもあつたげんどな。んだげんど家によつて十二月に金要る場合などあつてソな、そうすつど是非とも奉公して一時金もらつて来らんねべ、やりくりさんね家庭では年取つても奉公してる人あつたな。小学校終えれば必ずといつていいほど行がんなねと決まっていたもんだな。

十三・四才で行つたもんだな、奉公に。小学校四年生で卒業だからな、その上高等二年生なんだげんども、ほとんど高等小学校など出ながつたな。一年で六十円ぐらいだったな、奉公してな。

(3) お 針 子

女は、お針子で、寺のおかちやとかいう人さ行つて習つていたもんだな、主に急がしくない時な、主に冬だな。補習科というて昼行つたこともあつた。

女の若い者の集りはなかった。行儀見習いもあった。貧しい家の女はほとんど町家の女中に、前金で行ったもんだな。残っている人は家に余裕のある娘さんだ
ごでな。

飯豊町松原 山田さん聞き書き抄

木小屋の生活 (2)

(1) 若衆の祭礼建て

(2) 木小屋の生活

(1) 若衆の祭礼建て

八幡さまのお祭りは若衆がしたもんで、十五才の若い者あ、太鼓背負いと決つていたもんだ。虫送りもやつぱり若衆の仕事だ。小頭が先立ちになつて、ここではサツキ、みんな一軒も残らず終えたところで、虫送りするもな。この松原部落では…。若衆頭が下と上と二つの部落から二人ずつ、四人出て、寄付もらつたり、

神主招ばんべあ、何すんべあ、すっかり若衆頭の方で手続きしてお祭りするわけよ。今では獅子など出したて、お宮巡りぐらいで終して、それでも寄付だけは、少ないかと思うと少ないものな。(笑)

前には屋台出して獅子出してオミコシ様出してな、獅子入つどきは、ほんにお天道さま出てしまうのよ。遅くてはあ。今はお宮巡りして、獅子は逃げてそこらで遊んでいたなというほどなもんだから、二時頃入んべつす。

よっぽどなつたべなあ、獅子出さねぐなつてから、人いなくて幕かぶる者いなくて、獅子出さんねなて、オミコシ様ちよつこつと出ただけだな、庭さ。こんどは国道だから警察の許可取らないど、獅子振り歩かんねわけなんだ。んだからわけて(そうだから、ことその他)夜遅くなつど獅子も逃げて遊ばれんべげんども、早くになんど遊ばんねなの、国道だからやつぱり国道になんねうちだつて、そうだったもな。屋台作んのだて、駐在所から許可とつてすんなねがつたもな。

お文殊さまのお祭りには相撲掛けだったな。夜は芝居を掛けたり、舞台かけたなりやったもんだもな。今、若衆いないもの、さんねと、こういうわけよ。んだか

ら昼祭りの相撲ばかりで終してしまうのよ。今はなあ。してこんど飯豊町になった（合併）もんだから、元添川村でないもんだから、各部落から部落対抗だなて、若衆相撲して、あと学校生徒にとらせて終りよ。

昔は大人も契約したつたし、若衆もしたつたずだな。大人の契約は一家の親父べらだったな。隣保班毎にしたもんだつたな。今なの、契約なて言うたて、みな出稼ぎに行ったりしていないもんだから、まずはあ、この辺で家にいて飲み食いなどほとんどしねもはなあ。若衆契約は二・三男でもやっぱり友だち見つけてするわけだったなあ。（若衆講的なものの飲み食いのことを言っている）

あの当時は今みたいにテレビはなかったし、パチンコだマージャンだなていうことなかったから、やっぱり映画見に行くぐらいしかなかったな。あの時代はなあ…。まずここでは椿に映画館なかったときは長井だったな。見る人は山形さ行つて見てくる人もいたげんど…。

博奕は、この辺でなかったげんど、カゲ（宇津峠のカゲ）さ行くどあったな。

伊佐領・小国・沼沢な、それから新潟県さ入ってはよく博奕したもんだな。花

札ではもどかしいから、サイコロだべ、丁半で、あれは手っ早く決まっからな。人のちよつと目届かねでござしたもんだ。おれあ一回見たことあつたな。戸の口さ番人置かせるもんだつたな。誰それ来たていうど、すぐ連絡するようにして、そういうことにして錢を呉^けてな。さあ、見たことない人来たていうど、すうっと連絡して、そしてこんどはちゃんと止めて、知しやねっぷりして…。

負ければ裸でも走んなねこと始まつじだ。錢ないげれば、衣裳でも何でもかっぱがさつでしまうんだも。衣裳などは当り前だげども、田地田畑まで取らつたんだもな、本職にかかつど。伊佐領などでは本職いだつたもんだも。

虫送りていうのはお札書いてもらつて、神主さんからのお札たがつて村の境目さ立てて、そして小白川さ、太鼓叩いて、一軒一軒チョウチンつけて行くわけよ。その次の日は休みだから、サツキ休みとかねてすつどこなんだな。ここらは…。

(2) 木小屋の生活

ケゴヤというげんども、冬、稲などかたづけて牛の飼料でもバイタでも何でも入れんなねもんだもな。前には藁仕事したったもんだから、炉切つて、寒いもんだから木焚いたり、炭起したりして、ぐるりで若衆は藁仕事したもんだつし。半分とか三カ一とか板敷いて、そこさ炉石沈めておいたもんで春になつては板で蓋するようにして、そうすればまたそこで稼ぐわけよ。前には是非とも藁仕事すんなねがつたからな。今みたいに、俵は編むことない、藁一本いじつことないわけだ。んだから藁なんていうのは、余つて仕様ないげんども、やっぱり大きな百姓は田んぼですっかり切つて、吹つとばして藁も何も形なくして来るもんだから、畳屋もずいぶんとひどい風だもな、大きな百姓さ行けば行くほど、買わんねど、藁なくて。去年、一昨年あたりから福島^ち辺りからどんどん買いに来んもな。この辺さな。前には機械なてないべ、千歯で脱いでから、足踏みの機械な、「こいつはええもんだ」なて、こいつだこで。その次が動力でな…。

木小屋には、近所から集まったもんだ。ここらだらば一町七・八反から若衆置
ிட்டもんだからな。居っどこには二人もいたな。一町七・八反だれば一人はい
たな。善五郎、伊佐エ門どこなどは二人三人ぐらい居たけな、二町五・六反だど
な。年期奉公でな、あのあたり九十円から百円だったな、昭和四・五年頃はな。
こっちは一年の半分前ということもあつてな。旦那によつては一年の給料より高
く出すのよ、何故つていえば、

「ひどい仕事、あれが来つから、ひどい仕事は残しておけ」

ということになったから、そこで給料は旦那では見込んで、百円の年期奉公な
ら半年前だら五十円だげんども、おらえでは六十円出すというわけだ。んだから
いまにひどい仕事ていえば、

「あれ、誰それ来つから、明日、明後日にしろ」

なて、ひどい仕事は半分前の奉公人に残しておくということもあつたな。んだ
から半分前の奉公人のいるものは、五円か十円高かったもんだ。前金借つたとき
には二年契約、三年契約というのもあつたべな。

高等二年卒業すれば、よっぽどな旦那衆でなければ中学や大学さは入らんねがった時代だから、すっかり稼がせつからな。その時代はシキセざああったもんだ。仮に十六才から二十一才までのシキセで銭取んねでな、その代り旦那で着たり食せたり、小遣い呉つて使わんなねな。そいつ終えればこんど給料は一年なんぼと旦那で出すつだな、年期が切れればな。シキセは旦那との間で決めるもんだつたな。ほら、酒もタバコも喫みたいといえばやつぱり、なんぼシキセだていうても、盆・正月と契約とには小遣いは呉^けつだごで。それからお祭りにな。そいつの分け前で足んないときは家元の父親からでももらつて行く他ないがったべな。その時代はな。

一丁前で言いあ、縄ならば、三十尋ずつひろげたな十で一まる^{ひして}きで一人前だつたごでな。雨ミヌだと一日半日で言うたもんだ。荷背負ミヌは二日、そいつは旦那によつて、大所^{おおどころ}というてはおかしいげんど、旦那きばつとしているどこでは、百円だら百円出したことになつてな、雨ミヌが二日半日かかったりすつど、逆に半日分差引きされたりもしたもんだ。あんでひどかったもんだな。きびしいがっ

たもんだと思うな。今考えつどワラジは十足、足高草履の場合は二十足、荷縄四本、モトチというど十二尋でないがったべか。

むかしはひどかったなて言うたて、耳さ入んねがら若衆などさ言うたて駄目だ。言うただけ駄目だ。なじよな暮しもさんねで、味噌漬などばり食せらつじやなて言われつじど、それつきりだも。もつともおらだ草刈りすつどきは夜二時起きして草刈りしたずだ。まず魚なて、つめらんねがったな。弁当さなど。草刈りの時は茄子胡瓜出んべつし、自分で漬物さ生胡瓜の二本も入つて、味噌、弁当の脇さつめて生胡瓜さ味噌つけて昼飯食つてよ、そのくらいの程度だったな。

木小屋に集まんのは、奉公に来てゐる人だけで、家の親父などには会わんね。ひよっこりと来てみるこあつたげんども、まるまって半日居たり、一日いたりはしねがつたもんだな。後は若衆ばりいだものよ。若衆同士なもんだから、「おら家さ来い」なて、「いや、そつちの家さ行つたて、御馳走もないどこでさんねから、おら家さ来い」なて言い言いたもんだ。そんなことは旦那はかまねがったな。

びんびん寒じつどき、ツンとして立つてする仕事だれば別だげど、ねまつたり

アグラかいたり仕事すんだから、寒くていらんねんだ。火の氣のないどこには、
んだから火焚いたり炭起こしたりしていったものよ。集まっどきは六・七人も
集ばったもんだな。助右エ門の木小屋などにはな…。

若衆などオドケ話などばり語って退屈すつど、お菓子買つてこい、そして十錢
ずつの割合だの、二十錢ずつの割合だのとお菓子食い食いつたもんだごで。大所
の川西町の平万吉という家あつこでな。そこは大所だった。そこには奉公人が四
人だった。もつとも三町五・六反作つていたからな。それも、旦那、こうして
いっど、自分の家の田すつかり見えて若衆何しつたかすつかり分んのよ。一人前
なんぼに決つていっからよ。そいつ為残すどすつかり付け留め（書き上げること）
して差引きするわけよ。埋め合せ付けなければなんないのよ。

奉公人の食事の場所は膳部ていうて台所のかげのどこで、広く取つておいっだ
もんだもな。まいどはそこでお膳で食せつだもんだ。旦那も一緒に食つたもんだ。
あつちの方では別だかも知んねえげんども、一般には旦那も一緒に食つたもんだ。

四人も五人も置く家では、「鋏頭」というて一番古い者を頭に立てて、「今日は

何々だ」て、仕事の段取りをすんのは旦那でないのども。鋤頭を立てていたもんだ。奉公人の中からよ。長年いた人でな、その家の土地分っている人を、ちゃんと、「今日はまず田の草やめて、畠草生えたから、畑返してもらいたい」とか何とかという者が言うわけよ。草刈りに行ったときは、一反の草は半日で、何でもか刈んなねがったな。馬で持つて来んべあ、車で持つて来んべあ、一反ずつは刈んなねがったな。小前にいだって田の草なの熊手で取る時代だと、五十刈というから、九畝もあつどこの草取らんねがった。

若衆はその家の親父ど朝げから晩げまで喰付いて仕事すんの嫌だべ。と、「請取りする」ていうど、「ほんでは、あんまりええごで」て言う。そうすつど、「どこそこのは五十刈だからあそこすんべ」どて、てんでに鎌と砥石と熊手持つて行くわけよ。そうすつど自分が早く終して遊びだいもんだから、御飯食つてはあ、昼休やすびしないですぐ取るわけよ。そしてお天道さまあるうちに終して来て、家の人来る頃など、退屈して遊んで居、居したもんだごで。

「いや、にしゃ（お前）早いもんだ」

なていうど、

「おらだ、昼休びしないもんだも、そのくらい休まんなねごで」

なて、親父さ言うど、「ほだごで」なているもんだつたな。

田植の一丁前は五畝だったかな。苗取つて植えて、んだから楽でないのよ。そうなつどその苗は朝仕事に取つじだ。おらだの場合だど朝の二時に苗代さ行つて取つてみだつて、二四〇から二五〇など取ればタバコ一服つける暇がないがったからな。かなり楽でなかつたな、一丁前な仕事すつど思うど、とっても楽でないがったな。女の人が苗とつて植えるだけだと七畝だったかな。

下の平助さんなていうどさ行くじど、蚕千枚も置いて、そして田は三町も作つて、若衆の五人もおいていだもんだけな。して、田の草取りに来て呉^けろなて、七八人で行つてみつじど、「ここは一人前だつし」なて旦那言うて渡すわけだ。それだけの費用出さんなねと思つているもんだから、かまわずあずける。こつちは弁当持つて行つてだからな。そしてサツキなど、あそこはつきりしたもんだとおれは思い思ひしたな。田植終してサナブリだなていうど、田植衆ばっかりしか食

せねえもんだ。蚕手間取りはめないなだからね、さっぱり。蚕は蚕で、上がった時には、「蚕サナブリ」であっから、そいつはさっぱり関係ないなだからて、餅など搗いだって、蚕衆にはさっぱり食せね。そこははっきりしてるもんだと思つてだな。同じ家で稼いでいて、蚕と百姓で違うばりの話だげんど、そんで一ぺんはんたは半俵も大臼で搗くんだけ、十人ぐらいで、そいつケロッとして食せねもんだまな。おれあ魂消だったな。そして田植衆に、

「そなだ、稼ぎわるいから餅食せらんね」

なて、むさずらつで（ひやかされて）いるもんだつけ。

「おらだ、おらだにサナブリあるもんだも」

なて、蚕衆もケロッとしているもんだつけ。これは随分はつきりしたもんだと思つていたもんだな。

奉公のときは、夜わり（夜仕事）してお湯さ入って、タバコ一服喫んで寝つど、やつぱり十一時にはなつたな。ほんでお茶など沸かして飲まんねんだ。沸いていれば、「お茶など一服して寝つか」なて、飲まれつこともあつたげんど、女子衆は

寝てしまふんだしな、十時半などに寝られつこんだれば早いほうだったな。朝はやつぱり六時半ぐらいたったな。牛馬に食わせねでいらんねもんだから、今じぶん(冬)だればお湯沸かして食せんねんだし、馬だれば水ですぐにも食せられつけど、やつぱし、あんで朝げもそう寝ていらんねもんだもな。冬は二人いれば一人は道つけ(雪踏み)で、一人あ飼料食せんねし、是非とも起きんなねし、でも草刈りでは一番やせたな。二時起きして行つて一反刈つてきて、そしてまた車ひっぱつて行つて晩方また一反刈つて、早ければ肥塚拵うとか何とか、仕事あつたもんだ。隙はないもんだつたもな。

田畑そんがえいっぱいしない人は、今みたいに就職なていうことはなかったからな。まず学校あがれば、何でかんで、女だれば飯炊きとか、男だればどこそこさ一年奉公とか、まず親たちとしてやつたもんだな。とても家さばり置いておくと我俣で仕樣ないなていたもんだもな。そだな時代だから行く人だつて、やる人だつて何だて思わねでいたものだったべ、その時代はなあ…。

奉公に行つてで、途中で移るといふこともあつたな。そんときは金で、その旦

那に承諾してもらって、三千円なら三千円がな、これから稼がんなねげんども、そいつこんど金で返すから、隣の家さやつから、そうして呉ろて、親たちと旦那が相談したもんだ。

「いやいや、おら家だつて一年と考えたもの、金で返すことはしてもらって困る。今年どうあつても勤めてもらわんなね」

て言われれば、これは泣き往生しておかんなねがつたわけだ。前金とんねつたて、百円の場合は五十円とか六十円とか取つてるもんだからな、後の残金は稼ぎ終つてから残金は支払うと約束しているど、その金、証書にして、お前どさやつか、なていう旦那もあつたもんだ。そうすれば利子つくわけよ。

大抵の旦那は盆・正月、手拭一本だったな。タバコ・シャツなど呉れるのは、ええ旦那であつたな、それさ銭の一円もつけてもらえば、うんとええ旦那だった。衣類などは自分を買つて着んなねがつたな。んだげんども旦那によつては仕事着と股引は呉れるもんだけな。

休みはところによつてちがうげんども、四日おきに一日だったな。映画見に行

くぐらないなもんで、後は友人と遊んだもんだ。なんぼ休みだなて、夜飯前には飼料すんなねから、遠かいどこさ行くとときには、家の人さことわらんねがった。

本調査のために、奉公人の生活の体験者を探していただいた渡部史夫氏（米沢東高等学校教諭）と井上俊夫氏（山形県西置賜郡飯豊町役場広報係長）に感謝いたします。飯豊町内には今も各農家には木小屋があり、農具小屋として使用されている。

第二部

昔話

—

東根市

—

1 兎と田螺つぶ

八島与三郎

ある暖かい日でもあったか、兎が山を一日かけまくって遊んでいだというわけだ。ところが暖かい日でもあるし、喉がかわき加減でどこかに水がないかというようなことで、ずうっと降さがってきて、沢みたいなところに降おつて来たというわけだ。そいつは、あるどこにトコトコと流ながっている水の音めしている水を見けだていうわけよ。

「こりや、一杯飲のむい」と、そうして飲まんとしていたところが、田螺いたど。一匹な。

「なえだ、おかしな格好だない」なて、馬鹿にしていたわけだ。そして水を飲んで喉をうるおして、田螺けつさいろいろからくた（からかった）わけだ。

「なえだか、変てこだな。尻けつはねじつでつす」なていう調子でからくた。そして、トコトコ流れの水くぐり

尻つねじれて おらおかしい

て悪口したずも。

「なんだ、お前だけおかしいでないか。お前ばも、おれあ言うて呉る」

ホイト山の木かじり

耳が長くて、おらおかしい

て返したていうわけだ。兎も言わつたれば、われも言うていだはけて、これも仕方ない、走り方がつまんないもんださけて、

「走り方だれば、おれちや敵わねべなあ、お田螺さん」ていうど、

「いや、敵うも敵わねもない、そだなことは勝負ごとで拍子もんだ」

「ほだたて、足もなくて」

「いや、ほだなこと、差支さすかえない」

「ほだら、おれと走りくらしたらええがんべ」というわけだ。ほだればどこまでと、兎あとつと行つて旗立ててきたていうわけよ。

「んだら、あそこまでおれと走つくらしたらええべ」

そうして走つくらするべえと、並んで立ったわけだ。ほだげんど田螺はうしろさいたど。

「出はったらええがんべ」

「いや、おれは出はらねったて差支かえない。なに、おれは差支かえない。お前ばり負けねようさっしやい」

そういつて兎はヨーイ・ドンと走ったていうわけよ。そんとき田螺は尾おっぱさ。ピタツとくつついたど。そうしていよいよ旗さ近づかんとした時に、二、三米前に田螺は、ぼいつら離つて、その調子でストーンと前さ吹つとんで行つたわけよ。そうして兎は負けたていうわけで、頭かいて逃げて行つたていうわけだ。んだからあんまり自慢をすんなというごんだど。どんびん。

2 食わず女房

横尾高治

あるところに、欲たかり親父いたけそうだな。そしてその親父が何えだて言うど、やつぱり飯食ねで稼ぐおかた欲しいなだけそうだ。そしておかたもらったげんど、飯食せつだくなくて追出^ほしてやったなだけつだな。そしてその後さ来た後妻が、飯食ねで稼ぐな来たていうなだね。

「飯食ねで稼ぐなだけで、喜んでいだべちやね」

ところである日、親父あ、用達しに行つて夜遅く来たれば、まだ家さ灯^{あか}し点かつたていうんだな。相当遅くよ。夜中によ。

「はて、まず、灯点けて、何またしつたどこだべ」て、サマ（隙間）から隙見して見たていうなだ。そしたれば、その女は握飯^{やまめし}、すこだま飯炊いて握つたていうんだな。鍋の蓋さいっぱい並べつたていうなだな。そして、

「不思議なごんだ」て見つだていうんだな。したれば今度、その女は頭の髪結つ

たな、パランと解いで握飯やきめし、そさ打ぶつてやんなだけそうだ。そうして親父たまげて、

「はて、飯食ねで稼ぐどて喜んでいたけあ、こだな、こりや、女だ」て、恐かくなたんだべちや。気味悪くなてねえ。そして次の日、そいつ見だはげて、まず追出してやったなだねはあ。その親父は欲たかり親父で、飯食ねで稼ぐなていうたもんだはげて、飯食ねで稼ぐなんざあ、こだな者もんだというたとえだど。

どんびん。

3 油しめ（油とり）

あるところに、道楽で欲たかりな人いだけんだな。その人の願いは、その氏
横尾高治
神さま願掛けたていうのだな。

「どうか毎日仕事しねで、大事にしていっどござあないべか」て、願かけたてい

うのだな。

したれば一週間にもなって、満願の日が来たていうのだな。そしてその神さまのおつげあつけずまな。

「実はお前の思う通りのことは世話してやる。大阪の何とかいう旦那衆あつさげ、そこさ行ってみろ」

て教えらつたていうのだな。そしてこんど名指^さして神さま教えたもんだから、そこさ行つたていうのだな。そして行つたれば、大した門構えですばらしく豪華だけてだな。

「いや、やつぱり神さまのおつげ通り、すばらしいもんだ」てだな。そして入つて行つたていうのだな。

「山形から来て、こういうどこあるというんで、お宅さ上がったんだ」て云うたそうだ。そこでは、

「まず、よく来て呉^けだ。まず上がって」て、上がって、大した待遇であつたてだな。毎日山海の珍味ということもある。うまいものばり食せてよ、そうしていた

ていうなだな。

「ただいで食せつどこなて、ええどこ来たもんだ」なて、居たていうのだな。そして一週間も厄介なつていた。そんだて毎日唯いて、うまいもの飲み食いさせておくもんだし、こんどあ退屈してはあ、家から出はつてみたれば、お倉、いろは四十八倉だか漆喰のお倉ずらつとあるつていうんだな。そしてお倉なんぼぐらゐあると数えてみんべと、ずうつと数えて行つたら、三つ目のお倉さ行つたところ、少し戸隙すきつだつていうのだな。その隙からのぞつてみたら、したば、人はさかさに下げてよ、下さ炭がんがん置いて、脂とりしつたんだけど。入つてみてぞつとしたのだつたつだい。

「はあ、これは、おえないどさ来たもんだ。まずこりや、いよいよ、こりや……」その人も三日か四日うちにその番前ばんまえくんのだつたけど。ええあんばいに肉付いだけべちや。そいつ見たもんだから、なんぼうまいもの食せらつても喉さ行かねなつたのはあなあ。そいつ見てしまったものなあ。そしてこんどあ、

「一刻も早く出はらねばなんね」て、出はる工夫したてなだどなあ。そうして、

ぐるり土塀で逃げっこないなだけ。

「はあて、どこか早く、一刻も早く逃げねでは、どこからも逃げっこない」
て、屋敷ぐるぐる廻ってみたげんど、逃げっこないし、そうしたらある隅に松の木一本あつけそうだ。土塀さ枝かかってでね、

「はあ、これからだ、こいつから逃げねでは、どこからも逃げっこない」
て、それから、夜、松の木さ上がって越えんべと思つて登つて……。そしてその人、そつからなんぼ逃げたもんだか、松はつるつる、つるつる。上がんべと思つて滑つて来て上がらんねてだな。それでも一命にかかわるごんだて、やつとすつと上がつて土塀から越えて行つたてだな。そうしてみたれば陰はカラタチ藪だ。そのカラタチ藪一里もある。生命いたましいんだし、そこむぐつて行つたていうなだな。そうしてみたら自分の腹綿など無いっていうなだな。みな引かかつてはあ……。ほだて居れば殺されるっだし、そうして今度行つて、カラタチ藪越したら、アカシヤ藪また一里もある。そうしてそこ通り抜けて行つたれば、大河ある。河だて、そいつ漕がねば行かんねんだし、川さ入つて、ごわごわ漕いで行つたてなだな。

したれば腹綿などみな洗わつて、腹、みな無いていうなだ。

そしてようよう向う岸さ上がつて、どっちゃ行つたらええかどてはあ、見たれば向うの方へ山あつていうのだな。そこさ目がけて逃げねば仕様ないて、逃げだていうなだな。ずうつと逃げだれば山の中に沢登つて行つたれば、炭焼き小屋一軒建つてで、そしてこんど、そんどきに自分の番前来て、探し始めただけでいうんだな。

いよいよ油しめの番前来つたんだけな。

「ほりや、逃げらつた」

ていうもんで、後から追つかけて行つたんだつて。槍持つて五人も六人もずうつと追いかけて来たというんだな。そして逃げて行つた男が炭焼き小屋さ行つたら、年寄りじつつあがいて、

「まず、じつつあ、じつつあ、おれば助けて呉^けろ」

「なえだて、こだんどこさ来た」

「いや、実は、おれ、こうこういうわけで来たところが、こういう場所さ来て、

いま、おれも明日あす生命とられる番前さ来ったんだ、何とか助けて呉ろ」て言う。

「何だて、若い者、ここさ来たたて、助かった人ざあいねなだ」

「仕方ない、何とかして呉ろ」

「んだか、そだらええがんべ」

炭作って、出来っど重ねっただけそうだ。

「そしたら、こさでも入^{はい}つてろ」て、一番下の炭俵^{だら}さ入って重ねっだど。したら下からやあやあて来る音すつずもやあ。

「やあ、こつちや来たにちがいな」て、五・六人つれ槍持^{たが}って追かけて来るてだねあ。そうして炭焼き小屋さ来て云うのだど。

「じさま、じさま、ここさこういう者来ねがつたが」

「なえだか、先度^{せんど}な来たけんど、昨日^{きん}、今日は何も見えねな」

「あんだ、ズボ（嘘）語ったてわかんね、こさ来たの見っだんだ」

「ほだげど、おれどさ来ね」

それから、

「ここ、みな突いて見んなね」

そして、槍持ってみな突いたど。そうして突っただげんど、やつぱりその若い者入った下の一俵突つかねて云うのだな。突き逃がしたのだな。

「ほだら、先さ行ってみる」て、行っただけののだな。そして助かって、

「まず、ええがった」て、ちよと気付いたら、神さまの前さ行つて願かけでて、眠むかけしつたけて。ただ居て食うなという神さまのおつげだっけど。どんびん。

4 山田白滝

八島与三郎

むかしのひらかなない時代でもあつたがして、こうした東根でも一番という豪家があつたというわけよ。そしてそこには一人娘がいて、簪をもらわんなねという

ような家であつたわけだな。んで、

「おらえの家では、こういう家柄で簀をもらうにしても、なんたなでもええ、見たどこさえもええどええて言うようなごんでは、こりや駄目だ。この身成持しんようつてもらうには、相当の頭といい、度胸といい、そなわつた者でなくては駄目だ」
て。そして、ほれ、ところどころに立札をしたてていうわけだ。そしてそこに歌をかいて、これに返し歌をうまく返した者には、簀にもらうと、こういうような歌の文句を書いて立札をしたてていうわけよ。

娘といえば、誰から見ても器量は言うまでもなくええ娘だし、身肢しんしと言ひ、誰だつて簀なの行きたいげんど、もらつて呉けねごとには駄目だし、あらゆる人が目つけて見て歩いていうわけだ。

そうこうしているうちに、ある身成どか何どかである家の息子でもないなげんど、ある素朴な若者がちよつと目をつけだていうわけよ。

「はあ、こりや、これに歌さえも返せば、うまい、気に合つた返し歌さえもすりや、簀ももらわれるだら、一つ、おれあ出してみんべ」

て、こういうような心掛けで、なんとか一つ出してみつかて、書いて出したって
いうわけよ。そして、立札の歌は、

へ白滝に心よせたか山田の案山子かかし
ていうのだったから、それに対して

へ山田の稲も枯れそうだ

助けて呉くれろちや 白滝の水

て、こう書いたわけだ。その若者がね。んでこんど娘の方では、「山田の稲も」は、
これだらええということになったていうわけだ。そうして、いよいよ御祝儀てい
うことになったぞ。

「何も、おら家さ来るものは不自由はない。んだはけて、タンスだの長持だのて、
おら家では何もいらね。体さえも来つどええのだて言うようなことで来た」
ていうわけだ。そして立派な部屋もたせらつで、上げ膳、下げ膳で暮らしたてい
うわけよ。そうしているうちに肝心の娘殿の姿がそれ以来一つも見せねていうん
だな。

「こいつあおかしい、ほだげんど、こりや、ほだなことでセクセクしてらんね。必ず娘が居てもらわっただんだべ。必ずいつかは来んべさげて、まずほだなことでセクセクしていらんね」

で、こうしているうちに一週間もいたか、二週間もよったか。

ある晩のこと、夜中にガサラガサラて来たていうわけだ。そして言うことには、
「わがつまよ、わがつまよ」ていうたてよ。見たところが、なんとヤレ、白装束のザンギリかぶりの化物だていうわけよ。ほだげんどもその若者は絶対そういうことには驚かねし、落付いて相手なつたてよ。そうして言うことには、

「なえだて、おら家さはあなたをおもらいしたげんども、実はこういうわけで、おれとしての悩みがあるもので、この悩みを消さねうちには、とても聶にはできないんだ」

「そういうことていうのは、一体どういふことだか話してもらいたい」
で、こう言わっただ。娘のいうことには、

「実はおれとしては、なんとも食だくて仕様ない食いものがあるんだ。この食い

ものさえおれが食べたごんだらば、立派にあなたと添うことができんなだげんど、この食いものを自分が食べないうちは、とても添うことが出来ないんだ」

「んじや、そいつを食べて一緒に行つて食べて呉れることできないか」

「ほだなことなの、何、こと易い」て、そして、ほれ、

「お前の言うとおりになっさげて、出してけらっしゃい」

こう言うて、若者は出たていうわけよ。そうして娘のいうことには、

「ほだれば、今夜のうちに、おれについて行つてもらいたい」

て、こう言うたど。そして一緒に行つて見たげんど、どこさ案内するもんだか。

ところがある寺の屋敷に行つたていうわけよ。そして夜の夜中のごんでもあるんだし、気味わるいていえば気味わるい。娘の姿も化物の姿だし、場所といい、お寺のさびしい場所だし、行くときは鍬一丁かついで行つてもらいたいて、鍬一丁を持^たかせて案内したていうわけよ。なぜするなだて、恐るおそる行つてみたところが、

「ここ掘つてもらいたい」て言うど。

「はて、不思議なことする。一端こうした以上は、たまげてもいらんね。やるどこまでやってみんべ」

そういう気持でそこ掘ったというわけよ。したれば一つの、ええあんばいな棺が出たというわけよ。

「この棺を出してもらいたい」

そしていうとおりになつて棺を出したというわけだ。

「この棺の蓋を取ってもらいたい」で、こういうわけだ。言うなりに蓋をとつたど。ところが、蓋をとつてみたところが中にはええあんばいの子どもの姿が出たというわけだ。

「実は、わがつまよ、この死人を、おれは食べたいなだ。これさえもおれあ食べれば、あなたと添うことがきんなだ。今まではこれが食^くた甲斐なくて、添うことはできねなだつた」

で、開けるより早くかぶついて食つたというわけだ。そうして、

「うまかつた、うまかつた」というわけだ。家に帰つてきたというわけだど。

「はて、変なこともあるもんだ」て、若者もいたげんど、實際こうした覚悟でのぞんだもんだから、絶対におどろいたりしてはいらんねという気持で、恐るおそる来たずだど。そして家に帰って見たところが、ちゃんと家の方では娘は起きてはあ、御飯じまいから何からしったていうわけよ。

「ええがった、ええがった」ていうて、親たちからもな。そして見たところが、その娘の姿もカラリと変って、元の立派な娘の姿で来たていうわけよ。

「こんでこそ、おら家の躰になる人だ」ていうわけで、立派に同じ部屋で躰になり、立派に妻になったていう話だ。やっぱり度胸を見んがためにそうした計らいをしたんだど。どんびん。

5 炭 焼 長 者

八島与三郎

むかし、あるお姫さまといわつだぐらいな女ださけて、相当な家庭の娘さんであつたど。なかなか器量といい、頭といい、何でも抜けた人ではあつたけれどもなかなか縁談はないわけだつて。

「はて、不思議なもんだ、三十才になつても何一つ縁談が来ね」

というわけだ。その時その娘さんも親たちは無論のこと、気もんではいたものの、んだたて無いものには何故も仕様ないんだし、早く花嫁むかさりでもさせたいというのが人情なんだげんど、何にもその話さあないというわけだ。それから、

「何かなあ、まず、八卦おきみたいなどさでも行つてきいてみたごんだら、こりや、何かないもんだか」

というわけで、工夫にあぐつで、八卦おきに行つたていうわけよ。何か欠点があつてのことだればあきらめようもあつけれども、何と言ひ、指のさすどこあな

い抜け人であつたというわけよ。そして聞いてもらうど、

「お前としては縁談がないわけではないんだ。お前に縁談が決まっているところあ、ただ一人ある、それというどこは、宝沢入りというどこに、炭焼きしてる者がいる。そこだらたしかに縁があるようだ」

こう教えらつだど。

「年も年だし、もらつてさえ呉^けるならば、馬鹿でもない限りは商売なの、なじよな商売でもええ、自分としては金もすこだま持つてるし、何でも不自由なく行^ゆぐいなだはけ、どんな貧乏している人でも、何も差支えない。とにかく尋ねて行つて見ねごどには分んね」

こういうわけで、宝沢入りという山を尋ねて行つたというわけよ。そうして、炭焼きをしているというなだはげ、行ったら会^あういそうなもんだ」

て、山さ行つたずなだ。たずねたずねして行つたところが、どこからともなく木を切る音がしたというわけよ。いうとおり炭もいぶつて、炭焼きしたというわけよ。

「なえだ、何しに來たんだ」て言わつたど。

「いや、こういうわけで來たんだ」て。そうして、ほれ、

「こういうところに、お聞きしてもらつたところが、お前に縁があんなで言わつで、実は尋ねたずね來たんだ。おれのような氣に入らね女だべげんども、何とかお前のお嫁さんにして頂いてもらいだい」て、こういうたずんだ。

「いや、お前みたいなの、おれあ、ほだな貰う身分でない、こうして毎日稼いでさえも、やつとこ米を買い、味噌を買い、その日その日暮していんだ。駄目だはげて歸つて呉らっしゃい」

こう言わつたでいうんだ。

「いや、ほだなこと言わねで何とか、おれもほだな錢や金は持つて來つさげて、お前ちゃんなの、ほだえ難儀させねで暮させつさげて、なぜかもらつてばり呉^けらんねが」て、嘆願したていうわけよな。居るには仕樣ないし、そだえして二日・三日暮したていうわけよ。暮してみれば悪くもないんだし、また米もなくなつたよ
うだし、

「おれあ今日米買いに行ってくる」

「ああ、ほうか、ほだれば錢はおれ持ったから」て、大判小判あずけて、

「そいつで米を買ってござっしやい」て、あずけてよこしたていうわけよ。

「ほだか、おれは町さ行つて来る。留守はよろしく頼む」て、山から降りだというわけよ。ほうしてずうつと来たところあ、ある川みたいなどこであつたか、また水たまりみたいなどこであつたか、鶴とかサギとかいたていうわけよ。そいつ若者はいたつて呑気だから、何も持たない欲とでもない。それから鳥もいたし、思いがけなく自分がもらつてきた小判ぶつつけてやつたてだな。そうしていたもの、「たんと買つて来るように」て教えらつて来たんだげんど、いつもの通り米の二升も買つたんだか、いつも買つてくるものしか買つて来ねずもほれ。嫁さんは、

「いま来つか、晩方だはげて、来る近くだ」て、夕飯の仕度でもして待つてだというわけよ。ところがトコトコと来たというわけだ。なんぼか米だら一斗でも背負ってくる勘定して、食いものも、すこだま買つてくる勘定して見っだところが

何にも格別なもの買つて来ねていうわけだ。

「なえだて、あれば買つてきた。銭もあずけてあるから、なんぼも買うえなだ」

「なんだ、おれの銭、鳥居ださげて、ぶつつけてやったけな」て言うたてわけよ。

「なえだつて、そだなごどする。あの金あれば、相当のもの買うえなだ」

「あだな金だら、おれあなんぼもある」「どこにある」ていうたら、

「どこにあるなて、ほげな巡り石でも、ドンズキ石でも、みなそいつだなや」ていう。そしたら巡り石、ドンズキ石、みなそいつだけてな。それから魂消て、

「おやおや、これでは大したもんだ」ていうわけだど。そしたら殿さまにいろいろ買ひ上げらつて、得分をもつたお姫さままで立派に暮したど。どんびん。

6 初 夢

八島与三郎

ある一人の男、夢を見たというわけだ。なんだかこの夢は氣にくわねくて仕様なかったというのだなれ。それから隣の親父さ、まず遊びに言った拍子に、

「ゆんべな、おれあこだな夢見て、うす氣味わるくて仕様ない。なぜかほれ、あそこに八卦置きもいたし、なぜか夢判断してもらったらええべといたどこだやれ」
したれば相手の親父は、

「おれも、ゆんべな夢見たな、ほれ、んだげんど、おれあうんと氣持ええ夢で、何かうまいことあつかといたのよ」て、こういうわけよ。お互に夢見たというわけだ。ということは、まずい話だげんども、夢見て氣持悪れている人はダンベ大きいて大きいて、くるぐるこころさくるまいてる夢見たてのよ。片一方はカマスさ金でも入った夢見て、これはええ夢だと思つたてなよ。

「片脇はホカホカ力ている。片脇は氣分悪れ、なぜにもこいつあ判断してもらわね

ごどには、氣持悪れて仕様ない」て、こういうわけだ。そして二人は行つたてわけだ。ところがええぐない夢見た人から、まず、

「そういう夢見た。なんだか氣持悪れ、何とかこいつあ何故判断してくれらんねが」

「よしよし」

一方は一方で、

「おれはこういう夢見た。こいつあ何故判断してくれるなだ。おれも判断してもらいたいなよ」て、お互に出たていうわけだど。そうして最初のええぐないと思つた人には、

「これあ、とてもええ夢だ」て、こ言うわっだずまな。一方はええと思つたげんど、

「こいつあ、なあ、あんまり感服しないな。こりゃ」なて言わっだていうわけだ。

「こいつはどういうわけだべな」て言わっだつた。そして易者のいうことには、

「一方は大きくなって中さ入ってええぐなっているにも関らず、子孫繁栄の夢だ。

一方は袋を下げて戸の口に待ってる乞食の夢だ」て、判断さっだていうわけだど。

7 初 夢

八島与三郎

とんとむかしあつたけど。

ある正月の時でもあつたがして、正月二日というど、ええ夢を見つどしあわせだていうことあつたもんだから、正月二日の晩ていうど、宝船を折つて床の下さ敷いて寝つどええ夢見るといふ、こういうような話でいたもんだから、ある正月二日にええ夢見つどええと思つて、宝船を折つて床に敷いて寝むたていうわけだ。そうしてゐるうちに寝むつてしまつたど。

明日は元日だし、朝早くお詣り行かんね。そうして時計見たれば、もはや、十二時を打たんとしていた。んで、ほれ、一番早くお詣りに行ったらええがんべ、

御利益あんべと思って、八幡さまとか御薬師さまさお詣り行つたていうわけだ。そうして行つたところが、まだ灯り一つ点いていね。こりやおれあ一番掛けだと、こりやええどさ来たつて、灯を点けてお詣りしたていうわけだ。そうしたところが、天狗さまが出はつて来たていうわけだ。

「小僧、小僧、おう早いな、何かお前夢を見て来た、んねが」て言わつたど。ところが、ええ夢見たときには人に語んていうことになつてゐる。人に語つど無効になるていうて、

「こいつあ、誰ちやだて語らんね、ええ夢見た」

「ええ夢見たか」「ええ夢見た」「ほだら、おれちや語れ」て、こつていうわけだ。

「いや語らんね」「いや、ええから語れ」「いや、何つたて語らんね」^{なえ}「ええから語れ」て、そうして語らんねものは聞くだ、見せらんねていうものは見たいていう、ますます天狗さまが聞くだくなつた。なぜしたらこの若者が、おれちや見てきた夢を語つて、いろいろだましたげんども語んねていうわけよ。そうして聞くだ……。

「んだれば、おれが持つてる宝物、こいつをお前に呉^けつさげ、語れ」て声掛けたわけだ。

「いや、ほいつは何な宝物だ」

「これさえあれば、自分の思う通り世界を飛んでも歩くくいし、何かものを欲し
いて言えば、望みのものは出るし」て、こういうて聞かせたわけだ。

「ほいつは悪くない」て思っていた。んだげんども、果してそれが本当か嘘な
ものか、自分がそいつを持ってみたいごどには信用もさんねし、

「ほだら、そいつ、おれちや貸してみろ」て、こう出たど。何の品物だったか、
われあ想像するには、扇子みたいなものであったがして、「おれちや、ちよつと貸
せ」て、借っだていうわけだ。いろいろなこととなえたれば、飛んで歩^{ある}ぐいずま
や。

「こいつあええもんだ」

饅頭といえば、饅頭は出る。というわけでいろいろ自由自在にとんで歩^あいで、
自分の家さ来て、降^おってきたていうわけよ。ところがポイラ目さめたていうなだ。

そこで、

「ああ、夢であつた。こいつが正夢であつたか」て、いうことに気がついたわけだつた。

8 屁つたれ女中

横尾高治

ある旦那衆どこの女中いだけそうだ。その女中は、まず、屁たれ女だつたていうんだけな。ほだはげて、その旦那で夜番にええていうので、そういう女ば置いだんだけどな。女中によ。

ところがそこさ盗人は、時刻も寝頃になつたので、忍んで来たつけべあ。その時刻になつと、ダンダ、ダンダて屁たれつと。んだはけて、そこさいた盗人も、ちえつと氣掛りで入らんねくていたなだつたね。そしてしばらくして入つてきて、

女中の尻さ胡瓜けっのつるがらみを押し伏せらっだんだど。そしたらその「ダンダ」止まっただけ。そしてこんど忍び込んだったべちゃね。ところがいいよ入って来んべと思つたら、あわててつるさ引つかかたていうんだな。そうすつど盗みの現場さ行かねうち、だんだん始まって、ぐいら取つたので、中さ溜つたな。

へダンダ、ダンダ、ダンダ…。

て、うんと早く言うたていうんだな。それから盗人たまげて、物盗んねで逃げたていうんだな。どんびん。

9 吊し柿売りと南蛮粉売り

横尾高治

関山峠みたいなところで、吊し柿売りと南蛮粉売りが道づれになつてよ、そして峠で吹きあつたていうなだな。吹き合つて、お互に雪の中さ閉じ込もつて動かんなくなつたなだね。そしてるうちに、腹空^すき来て吊し柿売りは自分が食いもの持つてたはげて食つたつだけんど、南蛮粉売りは南蛮粉ではとても腹ごたえさんねしね、困つてだてなだ。

そして吊し柿売りさ、

「南蛮粉と吊し柿とつかえねが」て言うたつていうのだな。そしたら吊し柿売りは、自分が、

「南蛮粉なて、はつけな腹くつつくもなんないし」て、やんだがつたんだな、取換えんな。そして、

「嫌^やんだ、取換えね」て、吊し柿食つてずうつといたて言うのだな。そしてるう

ちに、南蛮粉売りは食うようないし、南蛮粉なめっだっだべちゃね。そうしてな
んぼ日ぐらい一日も二日もそうしていたべちゃ、吊し柿売りは凍^しみ死んで、南蛮
粉売りは南蛮粉は温^{あた}まりなもんだから、いっこうさしつかえなく生きつだってい
うなだな。

柿は冷えなもんだし、南蛮粉は温まりなもんだからな。どんびん。

10 旅の手品師

とんとむかしあつたけど。

横尾高治

ある雪降る晩方、旅人が、「今晚一晩、宿貸してけろ」て来たけというなだな。
ほんでその家では、

「おら家では、焚物もないし、泊めらんね」ていうたそうだ。そしてその人がい

うには、

「焚物も何もいらね。おれは実は手品つかいだ。おれ、焚物などいらねはげて、一晚ぐらい、おれの足焚いてあだっさげ」て言うたそうだな。そして、

「ほだら泊まらっしゃえ」て、囲炉裡端さ坐つてで、火は燃えっだけべげんど、
「おれは足焚いてあたる」て、足二本、囲炉裡の真中さ入っで一生けんめい燃やしたど。

「なえだて不思議だ、不思議だ」て、家の人は、

「まず、足など焚いて明日など行ぐいべか」

そして、一晚足焚いっだていうなだな。

次の朝げになったて。そして、「お世話になりました」て、立つたていうなだな。

「はて、不思議なもんだ、不思議なもんだ」ていたていうなだな。そしてところ
が、あまり不思議なもんだはげて、家の中見たていうなだ。そして見たところが
庭の上の方さ、むかしの木綿織る機師はたし下げっただけな、その機師ないず、ほれあ。

「はあて、そこさ機師下げっだつたのなげあ、はあて、ほだれば、あいつ焚い

たであんまいしな」て見たれば、その機師降^{おと}して、そいつみな焚^{おと}がつでだけてな。
そんでどんびん。

11 餅 と 金

横尾高治

旦那衆どこで餅搗いたら、餅から金出はったていうんだね。大判・小判だったな。そしてまずお祝いすつどこだてな。そこでそいつ出てるものなり親類さ、みなお使いしたそうだ。めでたいごんだてな。そしてお祝いしたど。

ある一人の出入りの人ちや、使いがなかったど。

「何^{なえ}だて、まず、どんな話聞いてきた」て行^なったそうだ。

「何だい、大将」

「いや、これほどええぐない話ないどて、心配してきた」て、こういう話だ。

「なえだや、おら家で餅から金出はって、おめでたいて言うに、何、そいつええぐないのがい」

「いや、これほどええぐないことないんだ」

「何んで、何んで」て聞くていうのだな。なかなか語らねけあ、

「いや、餅から金出はったて祝いたそうだてな。これはええぐないことだ」

「なえだ、金出はっておめでたいのに、ええぐないて、何でだ」

「いや、この身成持ち金（兼ね）だ、これほど縁起ええぐないのはい」

したれば、その後ますます貧乏になって、滅んでしまつたてな。

12 果てなし話

天上から長い禪下がつて来たずま。して長くて長くて、なんぼたごんでも、長くて長くて…。

蛇が穴から出はってきて、別な穴さ入って行っただ。今日ものろのろ、明日ものろのろ…。

第三部

民話のころ

— 私の民話序説 —

民話のこころ

私の民話序説

陽が西に傾く頃、味噌をつけた子どもの頭ほどもある大きなヤキメシ（おにぎり）を葉っぱにくるんで、遊んでいる子どもたちに一つずつ母が呉れたものである。その日の遊ぶ場所によって、隣の母であったり、向いの母であったりするが、何といつてもうまかったのは、自分の母の握ったヤキメシであった。「おにぎり」というより「ヤキメシ」という言葉がぴったりするのは、みんながそう呼んでいたからで、オニギリは遠足のときの海苔ヤキメシのことであった。

火所^{ほど}を長い火箸でかき廻して、その中に埋めた栗を掘り出しながら、祖母が語ってくれた民話の味は、「おふくろの味」がしたものである。「むかしあったけど、山合いの一軒家にな、飯食^{ましか}ね嫁欲しいという男がいたっけどなあ…」と語りが始

まると、子どもはすかさず「オット」と相槌を入れるのである。そこには話者と聞き手である子どもたちの新しい世界、小さな宇宙、輝きは真珠でもある宇宙が出現するのである。子どもにける期待も大きかったにちがいないが、同時に子どもの知識の宝庫でもあったのである。その民話は母の乳房でもあり、母の匂いでもあった。また同時に家族全員が囲炉裡のまわりに坐って、大人衆は藁仕事を、母はボロを綴り合う、家族みんなが一つになって呼吸し合うことでもあった。

中津川の岩倉というところの後藤とよさんに民話を聞いて、下手くそなガリ版の昔話集を出したことがある。その時、とよさんの孫さんである和枝さんからこんな便りをいただいた。中津川は「花笠おどり」の花笠の主産地である。

「寒さもきびしい冬になりました。おかげさまでおばあちゃんも元気で花笠作りの手伝いをしています。昔話の本とどきました。ほんとうにありがとうございました。私も楽しく拝見いたしました。中津川のおばあちゃんの昔話を読んで、笑ったり、ことばづかいがおかしいので、家族みんなで楽しみました。また来年も元気でおいでくださるのをおまちしております。（後略）」

民話は家族の心を結んでくれるものであったことは、この文面で十分理解できるというものである。しかし必ずしも楽しいものであったかどうかは、いろいろ問題の残るところである。

飯豊町の大平・新沼という部落は以前には「曲げもの」作りの部落であった。ある話者はこんなことを語ってくれた。一家総出で冬仕事に曲げものを作ったものだが、この仕事はなかなか手数のいる仕事であった。その上に技術もかなりのものであった。

曲げものの材料は檜や栗の木である。近くの山の材料では足りなくなってしまう、遠くの山まで行かなければ採れなくなってしまう、他町村である小国町や長井市の山まで出かけるようになり、日帰りが不可能となって山に泊り込んで材料を探さなければならなくなつたという。

そうして伐り出した木を、まず尺杖という曲り尺のように工夫して作つたもので、二尺五寸の長さにして、丸太状に切り落とす。これを「玉伐り」と呼んでいる。次にその切つたものを、斧で木目にそつて棒板状に割つたものを、背負つて

家に運んでくる。これが農作業や山仕事の合間の秋の仕事である。その棒状板を曲げものの仕事が始まる冬まで、家の前に掘ってある種池に漬けておくのである。

やがて秋の刈入れが終ると、池から棒板を引上げて、割り山刀なたというもので一分五厘から二分ぐらいの厚さに、木の年輪にそって割って行くが、それで失敗すれば今迄の仕事が一切無駄になってしまうのである。次に削り山刀という、両端に手のついた刃物でうすく板を削り、仕上げカンナをかけて、曲げにちょうどよい厚さにする。

炉には真赤になるほど火を焚いて湯をわかし、板をその中に突込んで煮る。柔かくなつたところをみて、丸く手で曲げて、合せ目にハサミをかけてから、その俣こんどは火棚にぶら下げて三日ぐらい火で乾かす。火棚にはいくつもいくつも曲げがぶら下り、乾くのを待っているものだったという。乾き上がると綴り目は桜皮でとじる。そして底は杉の板を丸く切って入れて、木釘でとめる。木釘の材料はウツギである。これに杉の木で柄をつけると出来上りである。ていねいなものは漆をかけたものもある。

こゝでながながと「曲げもの」の工程を書き上げたのは他でもない、この仕事に必要な技術もさることながら、家族全員がこの仕事を分担してやることを言いたかったからである。山から木を伐り出し、割って削る、カンナをかける仕事は男の仕事であり、煮たものを曲げたり、火を焚いたり、桜皮でとじる仕事は女の仕事であり、板を底に入れて木釘を打つ仕事は子どもの仕事であり、そのための桜皮とり、ウツギで木釘を作つて用意しておくのも、それぞれ女、子どもの仕事であつたという。

この曲げものの作りのときに、孫が囲炉裡の周りで騒ぐのは、刃物がころがつており、火がどんどん燃えているのであぶないし、湯がいつも煮えたぎつてもいる。仕事の邪魔でもある。そこでおばあさんの仕事は子守りすることであつたという。「孫がさわがねように、一生けんめい昔話を工夫したものよ」というばあさんもあつた。どこの家にも台所の板の間の片隅に掘りごたつが掘つてあつて、そこが孫を相手のおばあさんの仕事場であつた。他家で耳にはさんだ昔話は大事にしまひ込んで家にもつて帰つたものだという。

なるほど、民話は子どもにとって楽しいものであっても、語り手であるおばあさんにとつては、どうしても語り伝えたい、語り伝えなければならないものであつたという一面を私たちはそこに見ることができるといふものである。

白鷹町の百六十余話の伝承者である海老名ちやうさんは、民話を知っているだけ語ろうと思ひ立った動機をこんな風に耳うちしてくれたものである。

「現在は世の中も變つて、親に孝行するなんていう氣がなくなつてしまつた。しかし親孝行は決して悪いことではないべえから、それを一つ語つてみようと思つた」

という。また、正直者が馬鹿をみたり、働かないで食つて行こうなんていう考え方は、いつの世でも悪いことだともいう。そしてこうした考え方を一つ一つ温めて来た民話として子どもに語り継いで来たものにちがいない。目を細めて、おだやかな顔になつて語つてくれた「山姥から宝をもらった話」は養老の滝の説話よりずっと美しい民話だと思われる。

山姥から宝をもらった話

海老名ちやう

親孝行な娘がいて、親は病氣して、どこそこの清水飲みたいなあと言わつて、
「ほんじゃらば、おれは何とかしてその清水を尋ねて行つて汲んでくる」

「そんならば、まず、何か菓子でも呉れてやんべ」と、親からお菓子もらつて行つて、

「ここから行つたらばなあ、清水はこつちの方さあると言つたでないかなあ」と
思つたば、とてもきれいな冷たい水あつけど。

「まず、これ汲んで行つてあげたら、病氣も治んべ」と思つて、まず水汲みしつたところあ、年寄りの婆さんが棒ついで、

「水汲みか、おれあ腹減つたから、お前、お菓子持った、そいつ半分分けてもらいたい」

「はあ、お菓子なの上げるとも」と、自分が食つたところだけとつて、そしてそ

の婆さんさ上げたところあ、

「お前どこさ宝を上げるぞ。髪の中さ宝いっぱいしまっておくからな、お前欲しいもの、髪とかすと何でも出てくんぞ」

「いやいや、ありがたいごんだな。そがなことになっていたもんだべかな」と、家さ来て、

「親清水はあそこだごんだ」と言わっで、まず汲んできたから、あがれと言うたら、親は喜んであがつたところが、だんだん勢いついて、何食ってみる、かに食ってみると丈夫になった。

その話を、隣の友だちは聞きつけて、親がお菓子あずけてやったところが、やっぱし婆さんがまた来たつけ。こいつだなと、自分がお菓子食ってだどこさ婆さんが分けて呉れないかと、

「腹減つてたもんだから、呉れらんね」

「ああ、そうか。お前どこさ、そんじやらば、とんでもないもの授けっぞ」と言わっで来てみたところが、やっぱし髪とかしてみっど、シラミなのばりで、隣と

いうじど、宝石落ちてきたとか、いや、何とかいう。そしてこんど殿さま聞きつけて、

「その親孝行の娘をかかえたい」と。そして喜んで行く途中で、

「おれも来いと言わっだ」と、一つに娘がのつて、そして舟さのつて、その親孝行の娘をおつつけてやって、自分がのつて行ったらば、

「ほんじやらば、こつちさ来て、こうして呉ろ」なんて言うたつて。

なかなかすえないという、何ともまず。お給仕しろなて言うたてわかんね。あんまり髪もちやもちやだから、梳かせなて言うたて、シラミいっぱいこぼれて、こげな者、何者なんだかと言うて、

「何か、羊の番でもさせるほかてない」と、小屋さやって、羊の番させているうち、こんど前の娘が川から上がって助かったという話聞いて、その娘がまた呼ばらつて行つてみたところが、全くええ娘で、何させても何でもござれ。そうして宝物は頭から出るといふはなしだ。

「こがえな宝の娘もらいたい」と言うたら、

「そがえな、ええどこでない。王女になのなるごんだら、ありがたいごんだ」と、さっそくそこさ貰らわつて、親も安泰してええあんばいに暮したど。人まねしたつてわかんねから人真似しないこと。

（「牛方と山姥」より）

海老名家に嫁してから七人のお子さんを育てあげた嫗であるが、子どもたちを「財産のない家では、子どもが財産であるから、子どものためには、どんな苦労をしても、世間から笑われないように子どもを教育するのだ」といつていたと、五男の海老名照夫さんが回想していられる。そしていまわしい戦争に出征する子どもたちに、達者で帰つてこいと言いながら、「母の五ヶ条」を美濃紙に、握ったこともない筆書きで与えたという。小学校を四年しか行っていない母がよくも漢字まじりの毛筆でこう書いてくれたものと、長男の正二氏は中国戦線の間じゅう背ノウに大切にしまい込んでいたといい、それが生きて帰ることができた最大の理由であつたかも知れないと述懐する。

一、心を正しくし、人に笑われるような行動は慎しむこと。

一、人間と生れた以上は世の中の人のためになる事をするよう努力する事。

一、一日の行動を常に反省すること。

一、酒をのんでものまれるな、女に注意し、そして人の悪口をいうな。

一、健康であれ。

ちやうさんはこうも語る。

「長寿の秘訣は働くことだ。集まってお茶飲みなど好きでなかった」

そして八十才をすぎた現在も、伝統の長井紬を手ばたで織って、子どもの嫁、孫の嫁に一反ずつ分けてやるのだといっている。紬は着れば着るほど光沢が増してくる織物であるが、それにふさわしい姫の生活の姿は、民話の語り手というもう一つの典型を示しているといえる。

海老名ちやうさんの民話の語りは、数が多いというにとどまらない。柔かい語り口は、よく「お糸唐糸」にも現われている。

お糸 唐糸

海老名ちやう

むかしあつたけど。

お糸と唐糸という姉妹、お糸という者は姉で、かかは早く逝くなつて、そして継母をもらつて唐糸という娘をもつて、なんとかしてお糸を家さ置きたくなくて、何してもかにしても、お糸という者を使つて、ああだのこうだのつて、いじめっけんども、他さ行かねでつとめて、そんで唐糸とうんと仲よくて、あるとき、何とかこれを生埋めにして呉^けるほかてないと思つて、継母が山さ連^せて行つて、箱さ入つてなあ。

そんな時、唐糸は姉さケシの種子をあずけて、

「ずうつと撒いて行つてけろ」て言うから、箱の中からボロボロ、ボロボロとまいて行つたど。そしてケシの花をたよりにして山さ行つてみたらば、箱さ入つてだ。「姉さ、姉さ」て呼ばつたところが、姉さ出てきたど。

「家さ行くじど、こういう風になつから、どこかさ二人で行つて、どこかで働いた方がええか」て、行つて二人で逃げて、そこから行つたど。そしてまず二人で働いっだところあ、おどつつあんが旅して遠かいどこさ行つた後だつたど。そして帰つてきてみたら娘がいもないもんだから、こんどは子ども探ねに、自分が泣き泣き騒いだもんだから、目も悪くなつて見えなぐなつたど。そして、

へお糸唐糸いたならば、

この目はパツチリ開きましよう

て、ずうつと騒いだど。

「何か面白いこと、お糸唐糸なていう、何か、こりあ何だべ」と思つて、二人で働いていた家から出はつて行つたところが、親は着物でも何でも、ボロボロな着て、髭は生やす、髪はボウボウ、本当に見立てのない、そして「お糸唐糸いたならば、この目はパツチリ開きましよう」て言うもんだから、ずうつと騒ぐどこ見だど。

「これは、おどつつあんだ」というもんで、両方からこういう風に、「おどつつあ

ん」て言うたところが、

「その音は娘だ」ていうたら、目はパツチリ開いたど。

それではあ、天竺さ三人で飛んで行って、三つ星になつたど。三つ星さあそいつだど。そして三人が仲よく星になつたど。おどつつあんが真中の星だど。どーびんと。

文字にしてしまったものには、うるおいがなく、語りのニュアンスは失われてしまうのであるが、それでも連綿体とでもいえる語りは十分に読みとれる。あたかも民話の情景が一連のドラマとなつて次々に目の前に展開されてくる感じが語りの中に見られる。そして聞き手が入れる相槌によって、ゆっくり、時には流れるようにという具合に、そしてまた強く弱く、感動をこめて語られるのである。

民話が語り伝えられるとはいっても、聞き手の条件がそろっていないなければならないのは当然である。民話も大きく分ければ動物が主に登場する『動物昔話』から「花咲じじい」やら「食わず女房」などの『本格昔話』といわれるものや、ひよ

うきん者や智恵者が主人公となる『笑話』から、その地方地方で活躍をしている人物などについた『世間話』から『伝説』までが語りの中で現われてくる。しかし聞き手の成長段階に応じて語り手も配慮をくわえることになる。

大抵は『動物昔話』から始まる。何度聞いても飽きることがない「いたちとねずみの寄合田」の話などは、いたちがねずみを食うようになった理由を説明しながら、同時に幼い子どもには諧調な子守唄でもある唄がさしはさまれている。むかしの宿場町であり、赤湯温泉の入口にも当たっていた南陽市大橋で聞くことのできたものである。

いたちとねずみの寄合田

川井弥右エ門
むかしあるところに、いたちがいだったずも。そしてそのいたちは、越前の川

原さ栗いっぱい蒔いて、明日となれば大変ええ穂がでて、栗がいっぱい実ったんだど。

「こりや、栗いっぱい実ったもんで、今年は栗餅いっぱい食れる」て、喜んで、こんどは栗とったってええごんだと行ってみれば、さっぱり無くなっていたごんだど。誰かみな一晩のうちに盗って行ったもんだずもな。

「誰に盗らったもんだか、こりや。ほに、どさかに行つて探ねて来んなね」
「私たちは向うの方さ、ずうつと行つたずま。

向うから鳥がとんで来た。

「からす殿、からす殿、越前の川原さ栗蒔いた候が、もしもお前、知り申しまいかキチキチ」て聞いたらば、鳥は、

「おれあ尻、舐めないと教えね」て言うたど。

「ほんじゃ、舐めつから教えろ」て、からすの尻、ペタツと舐めたど。

「向うの山の、山のかげにあるぞ、カアカア」て飛んで行つたごんだど。それからまず、私たちはそう言わつたから、向うの山のかげの方に行つてみんべと行つ

たけど。栗などないんだし、そのうち、パイニヨロ、パイニヨロと、とんび飛んできた。

「とんび殿、とんび殿、越前の川原さ栗蒔いた候が、もしもお前知り申しまいか、キチキチ」て聞いたずま。そしたらとんびは、

「おれあ尻、舐めねど教えね」て言うもんだから、

「ほんじゃ、舐めっから教えろ」て舐めた。

「向うの山の、山かげにあるぞ、パイニヨロ」て飛んで行った。それからまず、向うの山のかげだというもんだから、行つてみんなと思つて行つたら、ねずみいだったど。

「ねずみ殿、ねずみ殿、越前の川原さ栗蒔いた候が、もしもお前、知り申しまいかキチキチ」て聞いたど。そしたらば、ねずみは、

「おれあ、知んまいの」て言うところさ、ねずみの子あ出てきて、

「だだ、だだ（父）、ゆんべの栗餅食いたい」て言うたど。

「こりや、ねずみの畜生だな。おれの栗食つたの」て言うわけで、ねずみの家の

戸をあけて見たところ、粟、みな盗んできて、山に積んでいだっけど。いちぢ怒つて、そのねずみ食つてしまつたど。

それから、いちぢとねずみは仲わるくなつて、ねずみさえ見つど、いちぢは追いかけて行つて獲るようになったど。とーびんと。

この民話の中の、粟盗人をさがしに出たいちぢが唄う「越前の川原さ粟蒔いた候が、もしもお前知り申しまいかキチキチ」とか「向うの山の、山のかげにあるぞ、カアカア」とか「ピイニヨロ」などは、民話の内容を知る以前に耳に親しい唄になつてしまつてゐるし、『瓜姫子と天邪鬼』の中で唄われる、

瓜姫子の機はたに

天邪鬼　ぶちのつて

キーコ・パタン

なども同様である。川西町のある家庭では、この唄をそのまま、風呂に子どもを入れるときに温まらせるときにこれを聞かせたという。耳に親しいことが、民

話を受け入れる素地としてあることも十分うなずけるいえる。

民話の語り手、特にすぐれた語り手は民話に憑かれた人といえるかも知れない。海老名ちやうさんは子どもの頃、よく近所のおばあさんを尋ねて、縫物をしている傍に腰をおろして「針に糸を通してあげるから、話をして下さい」とねだっては民話を聞いたものだという。また飯豊町大平に住む嘉藤さんは、二里もある小学校の帰りに、話上手なおじいさんの家に寄って、はなしを聞いてからでない和家人に帰らなかったといい、小国町の塚原名右エ門さんは、親戚の家に住んでいて、昔話をいくつ知っているかと聞かれて、五十話も語って賞められたことがあるという。南陽市大橋にお住いの三瓶ちのさんは、学校の行き帰りに友だちと「語りっこ」をして、互いに話の数をふやしたともいう。

こういう話から想像すると、祖母が「このむかしはどうしても語って聞かせたい」から語るといふ半面、子どもの方にも、「どうしても聞きたい」といふ欲求があったことがわかるというものである。子どもの心からすれば、「だから働かなくてはいらない」とか「だから人をだましてはいけない」とか「だから人の真似は

するもんでない」という教育的な意味ではなく、民話の持つ文学性こそが問題だったはずである。しかもこのような民話を一回限り聞いて終るのでなく、毎晩同じ話をねだって聞くとするのは、決して「だから…」を聞くことではなくて、その民話の中に展開され、構築されて行く一つの小宇宙の魅力に他ならないと考えてよいのではないか。今までの民話研究が語り手を中心とし、語りの座を中心として考えられて来たが、今後はもう一つの視点にその民話の受け手である子どもを据えてみなければならないのではないか。というのは従来の考え方の中には、民話が祖父や父の、どちらかといえば固い語り口、祖母や母の柔らかい語り口とか、夜になればいつも民話が語られ、昼はいつもわらべ唄がうたわれていたような子どもも据え方がなきにしもあらずであつたように思う。

新潟県では「節季なんずの春むかし」という言葉があつて、民話が集中的に冬に語られたことがわかる。冬の吹雪の晩に、炉の火をかき立てて、ばばあの昔語りに薫仕事の手を休めるのが、雪国・山国の民話であつたことがそうである。また「昼むかし語つど、天井のねずみに小便ひっかけられる」ともいう。忙がしい

昼に民話など語っていられないというのが、その意味であつたろう。そんな時の子どもは民話に代る別の遊びで時をすごしたものである。もちろん親に見つかれば怒られるような遊びも多かつたろう。『白鷹町史』によれば、橋のらんかん渡り、アンマさんにいたずら、コウモリ叩きなどを明治の頃の子どもはやったという話を記してあるが、しかし半面、子どもは子どもなりに大人の生活を真似た遊びを自らの中でやり、やがてそれが大人に近づいていく一つの段階をなすといった例も多かつた。

山手ではよく炭焼き遊びをやったものだという話を、飯豊町の新沼という小さな部落で聞いた。土竈や石竈で炭を焼く大人の仕事を見よう見真似で、田んぼの刈り入れが終わった頃に、田んぼの黒土をとって竈を作り、その中に木を入れて火を点けておくと、木炭ができたものという。そしてそれを見ている大人も、誰一人とがめる人はなく、やがてそんな風に自分の仕事を継いでくれるのだと見ていたのだらうといっている。この部落もまた「曲げもの」作りの部落であつたが、子どもは子どもで、小さな「曲げ」を作って、友だちの間で技を競つたものだ

もいう。

子どもが創造力を働かして自分の遊び道具を作って行こうとすれば、山国でも雪国でも農村でも、自分の周りは遊び道具の材料でいっぱいであつた。落葉はたちまち十二単衣の着せ換え人形の衣裳となり、ドングリはたちまちコマに変わったし、トゲのあるニセアカシアの皮を剥ぐとたちまち木剣に早変わりするのである。その子どもが変つて来たのではなく、子どもの創造力が働かないような社会のしくみに変つたことを進歩と見、発展と理解しているのではないかとさえ疑えそうな昨今でもある。

ある村で読書運動に努力している方から聞いた話だが、読書をするということ、親が子に本を買い与えるという形であるかのように本を買ってやるという。一緒に読み一緒に考える場こそが本を共に読むということだという最も基本的なことが忘れられてしまつているとなげいていたが、たしかに本という素材を与えるというだけでは読書は進まない。親と子が互に本の内容について納得し合い、または反撥し合うこと以外に、読書はないのではないか。民話そのものについて

も幼児への読みきかせそのものが「相槌」による納得と同じ意味をもつかどうかは疑問が残るといえそうである。

ともかく、民話は祖母の背にしがみつき、母の乳房を固くにぎりしめ、その時の子どものいろいろな条件を考えて、叱るように語る場合もあるうし、屁をひつたときに一つの屁の話という具合に長いつきあい、深い関係の中で民話が伝承されて来たことを忘れてはいけないう。それらの条件を再び現代の子どもに与えなければならぬということはないが、少なくとも民話の再話なり再創造の仕事にたずさわる人、ひいては民話を現代に生かし、自分の子どもたちに語りかけようという母親はその事をもう一度考えてみなければならぬのではないか。

(この項終り)

あとがき

この小冊にのせたものは、ともに不十分なものであるが、それぞれに一つずつ、急いで稿を作ったもので、今になってはそう急ぐほどのこともなかったと思われるものである。しかし書き改めるのもいささか気抜けしている今なのでそのままとした。

○「木小屋の生活」は日本民俗学会での小生の発表に対する桜田氏の御教示で調査したもので、調査に当たっては渡部史夫先生・井上俊雄氏に御世話になった。また「語り」を大切にしたのは、木小屋生活は調査以上のものがあつたからである。

○「東根市昔話」は滝口国也氏、山田亨二郎氏の御世話になった。また飯野光男先生と同行した。

○「民話のこころ」は私の昔話と児童文学への指向の関係を考えようとしたものであるが、子どもの成長と昔話・遊びと昔話などを今後の課題として考え

て行きたいと考えている。

木小屋の生活 民話序説

昭和四十七年四月十日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三二の三

山形短期大学民話研究センター資料叢書

け
ご
や
木小屋の生活

民話序説

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌ才さんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

